

Oskar Verkaaik,

*Migrants and Militants:
Fun and Urban Violence
in Pakistan.*

Princeton: Princeton University Press, 2004,

xvi+214pp.

ま み や けん さく
萬 宮 健 策

はじめに

本書での研究対象であるムハージル (Muhajir) とは、1947年にインド、パキスタン両国が英連邦から分離独立を果たした際に、現インド側から移住してきたムスリム (イスラーム教徒) を指す。移住してきた当初こそ、パキスタン政府の保護の元に不動産などの優先配分をはじめとする利益を享受してきたが、移住したシンド州内ではシンディー民族との対立が次第に顕著となり徐々に国内でのアイデンティティを求め始めた。

パキスタンは大きく4州に分かれ、それぞれ異なる民族が居住しているが、インドから移住してきたムハージルは、その大多数がパキスタン政府の方針に従う形でカラーチーやハイダラーバードをはじめとするシンド州都市部に居住した。一方、シンド州のシンディー民族から見ればムハージルは自分たちの土地に後から居住し始めた「侵入者」と映り、確執が生まれることになった。シンディー民族がムハージルによる「侵入」に抵抗する形で自らの「アイデンティティ」を再認識したように、ムハージルはパキスタン国内での「居場所」を確保するために結束力を強める必要性を感じ始めたのである。それが1984年の「ムハージル民族運動」(Muhajir Qaumi Movement: MQM)^(注1) 結成につながったと言える。

上記の背景を元に、本書では、著者によるパキスタンにおけるフィールドワークでの経験を中心に、MQMの成立過程に始まり、現在は政党となっている同運動が、パキスタン社会でどのようなアイデンティティを得ようとしてきたか、また他民族からどのように見られてきたかを、現代政治史を切り口として分析が行われている。著者自身が指摘しているとおり本書はムハージルを対象とした「民族誌」である。著者Oskar Verkaaikはアムステルダム大学地域社会研究所助教授であり、国際アジア研究所支部長を兼任しており、パキスタンでのフィールドワークに基づいた社会学分野での論文を発表している。本書は著者によるMQM研究の集大成と位置づけられよう。

本書は次の6章で構成されている。

第1章 民族化するイスラーム

第2章 ムハージル民族運動

第3章 パッカー・キラ (Pakka Qila)^(注2)

第4章 「愉しみ」と暴力

第5章 受難

第6章 テロリズムと国家

また、付録として2002年までのMQMの活動を中心としたパキスタンの政治略史、本書内で多用されているウルドゥー語彙の説明が付されている。では、各章でどのような議論が展開されているか見ていきたい。

I ムハージルは「民族」か

第1章では、パキスタンの他州での事例に触れつつ、同国における民族運動の歴史が紹介されている。著者は、パキスタンの国民は建国当初宗教上ムスリムであり、政治的にはパキスタン人であったが、ブルフィカール・アリー・ブットー^(注3)の時代にはそれに加えて個別の民族としての意識が目覚めた、と説明する。特に、比較対象として、ムハージルの流入により民族運動が活発化したシンディーの事例を取り上げ、ムハージルのアイデンティティが目覚めていく過程が記述されている。

パキスタンはインドとは別のムスリム「民族」の国家であるという、いわゆる2民族論のもと建国されたが、実際には彼らはムスリムであると同時に、パンジャービーであり、シンディーであり、パシュトゥーンであり、バローチーだった。ムハーシルはそうした環境下で、「新シンディー」(New Sindhi)などの名称で、自らをパキスタンを構成する別個の「民族」と位置づけるべく活動を開始した。一方で、ムハーシルの流入はパンジャービーたちの間でも「民族」としてのアイデンティティを呼び覚ましたと考えられる。

評者は、1990年12月からの2年間ハイダラーバード郊外のシンド大学に留学した経験を有するが、シンディーに囲まれたこの期間、ムハーシルへの敵対心を肌で感じる機会が何度となくあった。中には、ムハーシルの母語でありパキスタンの国語でもあるウルドゥー語を聞くことさえ受け入れがたい、という考えを持つものもいたほどである。第3章で触れられている「パッカー・キラ」での事件からあまり時間が経過していなかった当時のシンド州内陸部では、「ムハーシル＝侵入者」という不信感が根強かった。

現在までムハーシルは「パキスタン第5の民族」、「新シンディー」と認識されているとはいえない。評者は、パンジャービーをはじめとする各民族が自らの利権を守ることに執心し、ほかからの干渉をよしとしなかったことがその大きな要因と考える。ムハーシルという「よそ者」集団を受容できる余裕が他民族にはなかったと考えられよう。

第2章では、MQMの成立に至る経緯から、MQMがムハーシルの権利を主張する政党としてパキスタンの政治に積極的に関与し始め、その後凋落していくまでの状況が克明に記述される。

前述のとおり、MQMの結成は1984年11月であるが、その前身はカラチー大学の学生組織(All Pakistan Muhajir Students Organisation: APMSO)である。当時、アルターフ・フサイン現領袖(統一民族運動代表)ら数人の学生がムハーシルの権利拡大を要求するために組織した。その後、この組織は学生にとどまらずムハーシルの若年層に急速に普及し

ていく。しかし、1990年5月にハイダラーバード市中心部の「パッカー・キラ」での事件を境にMQMの変質が始まり、パキスタン政府による弾圧もあって凋落していく。

そして第3章が扱うのは、その「パッカー・キラ」と呼ばれるハイダラーバード城で発生した事件である。パッカー・キラ城趾内には主としてアーグラ(現インド、ウッタル・プラデーシュ州)から移住してきたムハーシルである靴職人とその家族が多数居住している。1990年5月に、80年代半ば以降悪化していたハイダラーバード市内の治安を安定させる目的で、同市内の不穏分子の温床と目された彼らを対象とした警察による大規模な制圧作戦が行われ、多数の犠牲者を出す事件が起きた。著者はこの事件を境にMQMの変質が始まったと見ている。評者もこの点は同意見であり、インド、パキスタンの分離独立以降、ムハーシルは「パキスタン第5の民族」としての地位を確立すべく様々な試行錯誤を繰り返してきたが、そうした一連の活動がパキスタン政府やパンジャービー、シンディーなどの民族に受け入れられなかった。こうした「よそ者」扱いへの反発がこの事件で爆発したものだと言える。

なお、第2章、第3章は歴史に基づく事実の記述であり、第4章以降での議論のための序章的な役割を果たしている。

パキスタン現代史、政治史を扱う研究書は多数存在するが、ムハーシルを主たる対象としたものは皆無に等しく、その実態や「パッカー・キラ」での事件の背景が明らかになることはなかった。特にムハーシルの若年層がどのような思考を行っているのか、彼らの本音を理解することは非常に困難であった。そうした観点から、この両章での詳細にわたる記述は貴重であると言える。

II ムハーシルはどこへ向かうのか

第4章以降ではその後規模が拡大したMQMによる事件を分析する。MQM支持者が暴徒化した後、政府の弾圧を受け弱体化していく過程が描き出されている。

まず、1986年以前はカラーチー以外ではほとんど無名だったMQMがハイダラーバードでいかに勢力を拡大していったかが、著者のフィールドワークによる調査に基づいて詳述されている。後にMQM指導層から離れ、中心的な役割を果たすことになる若年層の「仲間」が言わば「クラブ活動」的な雰囲気の中でその勢力を拡大していく様子が描かれる。彼らは「Qila Qaum」（城壁内の集団）として知られるようになる。

MQMの設立当初、スィンド州内、特に内陸部で広く支持者を集めていたパキスタン人民党（PPP）に対抗し得る勢力と位置づけられたが、同州内でのMQMの勢力が拡大するにつれ、逆にPPPやパンジャービーにより政治的な圧力がかけられる過程が描き出され、前述の1990年5月の「パッカー・キラ」での事件につながっていく。

1992年6月から半年間続いたパキスタン政府による「オペレーション・クリーンアップ」以降、数多くの事件の首謀者として起訴されているアルターフ・フサイン領袖は病氣治療と称して90年以降ロンドンに滞在し続け、英国の市民権も取得している。指導層の存在感の低下は否めず、その代わりに中心的な役割を果たし始めたのが上記の「Qila Qaum」と呼ばれた若年層の集団である。著者は、彼らの活動のキーワードとして本書のタイトルともなっている「fun」を挙げる。著者の主張する「fun」とは、傍から見れば許し難い暴挙をも含む「愉しみ」、「お遊び」であり、ムハーシル若年層を中心とするものたちによる、ムハーシルが置かれている現状への彼らなりの反抗であった。

著者は、ムハーシル変質の要因として、彼らがパキスタンに移住してきた当初の希望が失望に変わった点を指摘している。ムスリムによる新たな国家建設において重要な役割を果たすとの希望に満ちてパキスタンへ移住してきた彼らが、実際にはパンジャービーやスィンディーといったそれぞれの土地に根ざした主要民族から「よそ者」扱いをされたことはムハーシルにとっては屈辱だったと説明する。

しかし、スィンディーに囲まれて2年間を過ごした評者には決してそれだけでは説明できない部分が

残る。「崇高なるムガル文化の継承者」を自負するムハーシルの奢りはなかったのか。一時的とは言え、パキスタン政府からの優遇措置を受けたことは、他民族、特にスィンディーたちからすると許し難い状況だったと考えられる。1970年代前半に「言語紛争」という形でスィンディーとムハーシルが対立した原因でもあった。

1990年代以降のMQMの凋落はムハーシル内部からも支持者が減少し始めていることから明白であるが、彼ら自身にその原因の一部があったとも考えられるという点をも強調すべきと考える。

結びに代えて

凋落していくMQMの誤算はどこにあったのか、今一度考えておきたい。

パキスタン建国後、パキスタンを形成する各民族の中に、ムハーシルという別個のアイデンティティを受け入れるだけの余裕がなかったという点は指摘できようが、それは各民族においてもそれぞれの民族アイデンティティが定着しきれていなかったことに主たる要因があったと考えられる。そのことは、視点を変えてみると、パキスタン建国時の「ムスリムたちの国家建設」というパキスタン政府による「パキスタン人」というアイデンティティ形成が奏功していなかったという点に発端があったとも言えよう。

パキスタン政府は、1960年代に東パキスタン（現バングラデシュ）のベンガーリーをはじめとする各地の民族運動を押さえる目的で「西パキスタン」として団結すべくワン・ユニット政策を打ち出した。しかし、各民族の激しい抵抗を招き、1971年のバングラデシュ独立を許したほか、スィンド州で71年、72年の「言語紛争」が起きるなど、各地での民族運動を「パキスタン・アイデンティティ」形成に向かわせることができなかった。

このような状況の下、1950年代、60年代のノスタルジアを心の中に抱きつつ、ムハーシルは現実とのギャップにさいなまれ始める。彼らは、パキスタンは結局はパンジャービー、スィンディー主導の国家であり、ムスリムの国家ではなかったことに幻滅を

感じ始めた。インド亜大陸においてムスリムが「ディアスポラ」として存在していたことが、パキスタン国内でのムハージルの実情と重なって見えたとき、パキスタン国内での居場所を得られていないことに気づき政府への抵抗となって形に表れた。ムハージル若年層はMQMという団体を利用し、自らの存在感を彼らなりの手段で示したのであろう。

MQMという、これまで具体的な実態が必ずしも正確に把握されていなかった団体、政党の内情が著者の詳細なフィールドワークを通して明らかになり、またMQM、ムハージルという集団を通して、現代パキスタンが抱えている政治的、民族的な問題を明

らかにしたという点、中でも「パキスタン人」というアイデンティティに不足していたものを浮き彫りにできたという点で、本書は高く評価できよう。

（注1） 1997年の内部分裂により、現在は「統一民族運動」と「ムハージル民族運動」とに分かれる。略称はともに「MQM」を使用している。

（注2） ハイダラーバード市内中心に位置するハイダラーバード城を指す。

（注3） 大統領在位：1971～73年、首相在位：73～77年。

（財団法人世界政経調査会）